

不思議な水

～ノエルの夜に～



黒野 ている

★このお話は登場人物も含め全てフィクションです

大きな重たいドアが あたしのために開けられる
いつもなら かしずいてくれるギャルソン達があたしに背を向ける

「あたしの仔猫を返してよう」

冷たい夜に叩きつけられたあたしは、届くはずもない願いを叫んでいた
あのふわふわの仔猫をとりあげられるなんて、あいつに部屋を追い出されるより もっともつつ
らかった

舗道を歩く人が あたしを遠巻きにして去ってゆく
ひとの声が遠くなってゆく
ノエル（クリスマス）のミサに教会へと急がせる声
鐘は鳴り始めている

あたしは...一番の売れっ子なのに
今の今まで そうだったのに

悔しい

石畳に打ちつけた、はだけた肩がじりじりしてくる
ひざも、顔ですらも 焼けるように痛んできた
ねじりあげられていた右腕は もう動かない

動く部分だけでそっと起き上がろうとすると
からだがふわり、と浮いた

なんだ、捨てられたのか

見上げると 大きなクマのようなひとがあたしのからだを抱き上げていた

「はなしてよ！捨てられた、なんて言わないでよ」

そのひとは あたしを下ろすことなく、近くのボールに入っていく

「どう見ても捨てられた顔だぞ」

キレイに仕上がっていた売れっ子はそこにはいなくて
くしゃくしゃに荒れた髪
赤くはれた頬と鼻
血のにじむ肩・・・

壁にかかるミラーにうつっていたのは確かに「捨てられた女」だった

「・・・わかったから、下ろして」
あたしは低い声で伝えた

洗面所の冷たい水が傷に沁みる
こんなんじゃ しばらく仕事にならない
それよりもクビかな

あいつに追い出されたら

店には戻れない

ドアを閉めると クマのような男はここに座れと古びた椅子を差した

なにか飲むかと聞かれたけど

考えもつかず

いつもの口癖でロンリコをストレートで貰う

「あっ！」

口の中がはじけるように痛くて
思わずグラスを口から遠ざけた

口の中も切っているのだろう
思い切って一気にあおった

「ねえ、あたしの顔 知ってる？」
あたしはクマにたずねる

「知らねえ」
クマはグランドゥルスと名乗る

「なによ、知ってて助けてくれたのかと思った」

あたしは ベーゼ
さっき 追い出された店の一番の売れっ子よ

「一番の売れっ子が追い出されるなんて」
グランドゥルスが笑う

あたしとしたことが
手を出してはならないものに
惹かれた

店の客に ノエルのプレゼントを貰ったのよ
とっても素敵でさあ
嬉しくって嬉しくって...

でも それは罠だったわ
プレゼントには盗聴器が仕込まれてた

秘密が漏れていることに気づいたあいつは、そのプレゼントこそ怪しいとふんだ
あたしは追い出されるのを覚悟した

そのプレゼントって
ふわふわの毛並みの、それは可愛い仔猫なの
毛並みに隠れるように小さな発信器がついてたみたい

どんな客か問い詰められて

答えたら...

今に続くわけよ

仔猫の可愛さについ気を許してしまったの
貰ったものを身につけるのは
その日限りって
決まりがあるの

長く手元に置くなと...
それを破ったのはあたしの不手際

罰を受けるのは慣れてる

でも

あの仔をもう一度抱きしめたい
だってあたしがいないとあの仔...

だめ...辛くなっちゃった

ねえ、
もう一杯 同じものをちょうだい

夜があたしの居場所だった
明かりのそばに行けば 誰かいる

暖かく迎えてくれなくても
一緒に群れていられれば
それでよかった

たとえ口くでもないやつらでも
あたしの足をひっぱる奴らでも
どんなウジのようなヤツでも

いないよりはマシ

いつ帰ってくるかわからない、
母と呼ぶにはふさわしくない女と住んだ部屋

冷蔵庫の中の 昆虫を詰めたジャム瓶の列
摘んだ花を敷き詰めたベッド
ひと時の悦楽は 夜が明ければ
ただのゴミの山

そんなものを見つけられては
外に追い出された

神父のお話は呪文のようにわけがわからず
預けられた施設では
甘える限度がわからない

懺悔の暗い部屋にひとり入れられる

温かいスープがほしかったんじゃない
あたしは なにが良くてなにが悪いのか
教えてほしかった
あたしだけにわかる言葉で
話してほしかった

力づくで 手枷から手を引き抜いて
逃げてきた

あたしはキリストでもマリアでも羊でもない
神様なんて信じやしない
なのに 教会でつながれてるなんて
冗談じゃない

あの店の前で行き倒れてたのを
あの店のオーナーに拾われた

歩ける距離じゃないって言われるけど
あたしもどこをどう歩いたかは・・・

こんなのこの街じゃよくある話だし
どんなにがんばったって
誰もあたしの存在に興味なんか持ちゃくれないけど
あの仔だけは 真剣に聞いてくれたの
もしも神様がいるのだとしたら
きっとあの仔は天使だったのよ
天使を 授けてくれたのよ

まっすぐな目で
ずうっと ずうっと・・・
あんなに小さいのに
あたしのことを受け止めてくれたの

今のあたしの 力の入らない右手は

グラスをつかむこともできず
震える左手は
涙をふくこともできなかった

初めてできた 友達...
そんな形で現れるなんて

やっぱり あたしには
本当の友達なんて いなくてもいい

クマさん
もう一杯...っていいたいけど
あたし
お金もなーんにも持ってこなかった

どうすればいい？

グランドゥルスは 黙ってあたしの話聞いていた

「しばらくこの二階に泊めてやる。朝になったら 医者へ行って腕を見てもらえ」

「あたしは無一文なの、医者代なんか・・・」

「腕が治ったら ここでしばらく働け。そこから今日の酒代は引いてやる。それでどうだ」

3杯目のロンリコがあたしの前に置かれる

驚いてあたしはクマのような顔を見つめた

「あたしに親切にしてくれるっていの？」

「どうにもならんだろう、その腕じゃあ」

思い通りに動かない右腕は、だんだん痛みを感じるようになった

でも

こんなの自分で治すから

今までもそうしてきたから

ひとの世話になんかならない

ぐっと唇をかみしめて

グランドゥルスを見た

「あたし・・・公園で寝る。子どものころから慣れてるからいいの。それに ここで働けだなんて、今の」

今のあたしに優しくしたら馬鹿を見るわ

その言葉が 涙で出てこなくなった

「なんで・・・あたしに親切にしてくれるの？」

グランドゥルスは何本目かのタバコに火をつけた

「お前にそっくりな女を 昔拾ったことがあってな」

その先を聞きたかったけど グランドゥルスの話はそこまでだった

「お前 親の名前 言えるか」

「母親なら」

行った先で名前を変えていたから

本名かどうかはわからないけど

一番よく使っていたのは

『カリスト』だった

グランドゥルスは タバコの火を消した

「あたしの母親を 知ってるの？」

グランドゥルスの表情からは それはわからない

「あたしと違って髪は暗いブロンド。痩せていて、目が大きくて。首に古い傷があったわ。これはどうしたの？って聞いたら機嫌が悪くなったから憶えてる。」

安い酒ばかり飲んで
あたしが施設にいる間に
身体をこわして・・・
知らないうちに 死んじゃったみたい

あたしにとっては 機嫌の悪い女
思い出なんて それだけよ

何度 部屋を追い出されたことか
そのたびに公園で夜を明かした

いつもそばにいてくれたのは
ノラ猫たち

あたしは ああなりたくない
ひとには優しくするんだ
優しくなって ステキな結婚をして
子どもには優しくしてあげるんだ
こんな思いは絶対させない

おまえたちも あたしに優しいね
いつも一緒にいてね

とおりすがりの店先から
掠め取った食べ物を
ノラ猫たちと分け合いながら
そんな話をしていた

あたしは 3杯目のロンリコを 飲み干した
もう口の中の感覚なんてわからない
肩の痛みも 顔の痛みも うそのように

ただ 動かない右腕だけが
今日の出来事が夢でないことの証拠だった

そんな女の子もだなんて不名誉なことだけど
いったいどんな過去があるのか知らないまま
気がついたら この世からいなくなってた

てことは
あたしの過去も一緒に消えたわけ

父親が誰で
どうやって産まれたのか
どう育ったのかも知らないまま・・・

こわいよね
誰もあたしのこと知っててくれないなんて
あたしの存在
もうこの世にないのと同じなの

「俺の知ってる女はな」

消しきれないタバコの煙が
グランドウルスとあたしの間で
また白く立ち上る

もっとお前よりも若い頃に
やっぱり 道に転がってたよ
真冬の凍りつきそうなセーヌの川岸に
ほとんどまともな服も着ずにだぜ

真っ白な顔色は もう死んでるみたいで
まつげは凍りかけていた

綺麗な顔立ちで
磨けば光るんだろうが...
やさぐれてひどいもんだったな

その次の日も冷たい朝だった
目を覚ましたあいつは
俺の顔をまじまじと見つめて
俺にくっつかかってくる

「なんで助けたんだい！私をあのまま死にたかったのに！」

あいつはわけのわからん錠剤と酒を一緒に飲んだらしい
なんで死にたいのかって聞いたら
誰も自分のことを見てくれないからだと愚痴を言った

あまりにもくだらんから

「じゃあそのままほっとけばよかったな。丁寧にセーヌに放れば願いが叶ったな」
と言ってやったら 大声で泣いた

「私のこと、そんなに考えてくれる人、初めて」
そう言って泣いた

気のいいやつで
機嫌のいい時は天使のようなのだが
ひとたびヘソを曲げるともう大暴れさ
おかしなことを言ってみたりしてみたり...
人だかりがあれば、必ずあいつが暴れてたな

落ち着かせてから、
おまえ なんで暴れるんだって聞いたことがある

私が暴れてるんじゃない
私の心の中にあるものが
噴き出すのだと

出してしまわないと
自分が壊れそうになるのだと

でも すべて出してしまうと
しばらくの間 心はうつろになって
人形のように動けなくなると

ギリギリまで我慢しなくても
少しずつ出していけばいいのにと言ったが
あいつには 最後までわからなかったらしい

あるとき 気が立ったのか
あいつはワイン抜きを持ち出したことがある
ひとに向けるわけじゃないが
危ないんで取り上げようとした時
先があいつの首をかすめた

動脈こそ外したものの

かなりの血が出て

ああ、こいつも生きてるんだなと

そんなことを思ったりもした

俺も半分壊れかけていたかもしれない

なにしろ そういう奴と一緒にいるのは

難しいことだ

さすがに 疲れと酔いがまわってきたあたしは
グランドゥルスのお話を夢うつつで聞いていた...ような気がする

あいつがいったいどんな生い立ちなのかは
俺にも話さず終いだった
ただ今でも そんなに悪い血筋の生まれではなかったような気がする
教えなくともにじみ出るようなものって あるんだよ

あいつはどんなときも姿勢だけはよかった
どんなに辛そうなときも
背中を丸めることだけはなかったな

いいかげんに見えても芯は強いんだろう
些細なことを口に出せないんだろう
だから
ときに 自分に潰されそうになるんじゃないかと思う

弱いものには優しく
納得いかなければ 強いものにも噛みついていく
厄介になる警察にも顔見知りが増えて...

幸せなことだよ
あいつには必ず味方がいた
なぜ誰も自分のことを見てくれないなんて言ったのかわからないくらいだ

「あたしもそうになりたい。優しくなりたい、強くなりたい」

あたしは眠気も覚めて
次第にグランドゥルスのお話に惹きこまれていた

でもな 外からは見えない闇は
あったんだろうな

どこまでって限界のわからない奴だから
歯止めが効かなくなって
気がつけばあいつは疲れきってる

まわりは優しいあいつを求める
そこから上手に逃げることを知らない
おかしい奴らとも対等につきあうから
悪い方へも引きずられる
善悪のバランスが取れなくなると薬に手を出す
それで暴れる、の繰り返し
手綱を緩めるわけにはいかなかった

俺はあいつを叱りはしない
出来ないことを叱ってもしょうがないだろう
考えを受け止めてやる
足りないところを足してやる

ありあまるパワーには
それくらいのことしか出来ない

いつの夜も あいつは言うんだ
それはそれはか細い声で

「いつまで？」 と

いつまでなんて 約束はできない、
とあいつに言った

教えてほしいのはこっちの方だ
俺はとにかく疲れを感じていた

あいつはますます
体調も精神状態も悪くなるばかり
不安定な時期が続いて
酒を手にするが
飲めばその場で倒れるから
酒も飲めなくなって・・・

ある日 あいつは
俺の元から消えた
またどこかで元気にやっていればいいがと
ダメモトで願うしかなかった

それから数年
俺もすっかり あいつのことを忘れ去っていた

ところが ある夏の日
俺の前に突然現れたんだ
元気なあの頃のままでの姿で

「元気か」

あまりに驚いて 気の利いたことも言えなかったが
あいつは気にもせず

「元気よ。仕事も見つかったし、なんとかやってるわ」
笑ってみせた

唯一違ったのは
小さな子どもの手を引いていたことだ

黒髪の巻き毛の
まん丸な目をした
あいつに似ているようで
似ていないような
少しおとなしいのが気になったが
女の子なんてそんなものだろう

あいつの声を聞く日が
くるとは思っていなかった

「だんだんわからなくなってきたの。私は子どもに優しくしてやりたいと思ってた。でもね、それが余計なときがあるの。こんなにしてるのによって、通じなくてムシャクシャする。この子にも当たる。怯えた目で私を見るの。私、そんなつもりじゃないのに...」

優しくするって
私の思い描いた幸せの図になることじゃなかったんだね
私が優しくしてればみんな幸せになるのかと思ってた

違う
私の思い通りにしたかっただけ

今まで私はそれに苦しんでたことに気づいたの

優しいって誰のため？
強くなるって誰のため？
全部 自分の勝手な予想図で
それを完成させるために
まわりの人を動かそうとして
うまくいかなくて

イライラして 当たり散らして
もう何もかもなくなってしまえばいいと
私がいなくなればいいんだと

それで何度も死のうと思った

でも この子が教えてくれたの
私がいかがんなことしてても
この子は私を必要としていた

うけとめることの大きさを
永遠に続くものが何なのかを
この子が私に教えてくれた

あいつは巻き毛の女の子を連れて
遠ざかっていった
背筋の伸びた、相変わらずの品のある後ろ姿だった

それが最後のあいつの元気な姿

あいつが出ていく前に
「いつまで」 って
しつこいくらいに聞いていたのは

「永遠に」 という
俺の答えを待ってたんだろうと
そのとき気づいた

答えを出してくれたのは
あいつの子どもだった

俺でも言えなかったことを
そんな小さな、
ひとりでは食べるすらままならない、
まるで勉強も人生経験もしていないやつが
あいつに伝えることができた

あいつに永遠なんて言葉は似合わないが
ないものほど欲しくなるもんだ

そのあとは・・・

もう止そう

カリストは

亡くなった

永遠なんて

自分の心にしか持てないのに

手に入らないものばかり追って

散った

ひとから見ればメチャクチャな人生だが

自分の人生を自分で歩んだ

偉い奴だよ

ノエルの夜に
もし本当に神様がいるのなら
お願い
このきかない右手をもぎ取って
涙をとめる手と
いますぐに取り替えて

あたしはそんなことで感動するほど
安くはない

「違う、あいつはそんなに立派な女じゃないの！あの女はあたしにつらいことばかり・・・」

あたしはずっと恨んでた
いなければいいと思ってた
かわいがってくれたこともない、
母親らしいことなんてしたこともない、
そんな夢のようなことというわけない！

名前は同じでも きっと別の人よ・・・

「それならそれでいいさ」
グランドウルスは言った

与えるものが多ければ
奪うものも多い
それもまた人生

今 おまえがこうして生きていて
あいつと同じことを言うのを聞いて
ちょっと思い出したのさ

おまえにとってはロクな母親ではなかったんだろうな
かわいがってるつもりが足りない、
大切に思っているけど伝わらない

でも

俺といた頃の廃人のような姿と比べれば
おまえを連れて来たときのあいつは
まるで別人のようだった

おまえがどれだけあいつを支えていたか
あいつがおまえをどんなに大事に思ってたかは
俺にもわかる

身体もまともじゃないのに
俺に何も言わず
ひとりでおまえを産んで育てた

あいつが毎晩のように
「いつまで」って聞いたのは
腹に子どもがいるのを知って
この先の確実な答えが欲しくなったんだろう

俺は答えを出せなかった

苦しかっただろう
それで
一人で生きていくことを選んだ

俺の元を去った

俺も若かったし
その瞬間しか見られなかった
永遠に、なんて考えは
俺のどこにもなかった

それをあいつに約束できたのは
おまえだけだ

永遠にあいつを求め
永遠にあいつを信じ

永遠にあいつを支え...

他人じゃないからな

おまえは

切ろうと思っても切れない縁だよ

誰も教えてくれないなかで

おまえへの愛情を

どう伝えていいのか

おまえにはおまえの意思がある

親の思い通りに育つ子どもはいない

部屋を追い出された？

おまえ そのあとのことを考えたことがあるか？

追い出すのはな

それ以上 おまえを叱るのが辛いからだ

あいつはきちんと育てられない自分を

責めてるんだよ

追い出された後

おまえ どうやって部屋に帰った？

何度も追い出されたってことは

おまえ 戻れたんだろう？

あたしのなかで

深く深く 奥の方にあった記憶が

呼び戻される

むせかえるような香りと

柔らかい胸

首の傷を隠すような金色のクロス・・・

そんなところに

飛び込んでいったことも

確かにあった

「嫌い っていうのは、深い深い気持ちの裏がえしだからな」

これ以上自分で育てる自信がない・・・

あいつは

その先のことを考えあぐねて

おまえを施設にあずけたんだろう。

そのあとのことで

俺が知っているのは

あいつの最期だけだ・・・

偶然 俺の目の前で

跡形もなく

散りやがった

初めてあった時に

死顔なら見てるからな

死に目に会いたいなんて

思いもしなかったが

俺たちは そんな縁だ

おまえが

優しくなりたいと思ってるのなら

あいつの願いの半分くらいは

叶ってるんじゃないのか

まあ

子どもでもできたら優しくしてやることだな

おまえが仔猫にしてやったようにだ

おまえの自由な考えで

おまえの決めたやり方で・・・

もう今日は寝ろ

立てるか

目の前はぼやけていたが
立ち上がることはできた

二階への暗い階段を
グランドゥルスにすがりながら登る

「一つだけ教えて。その人があたしの母親だとしたら、あなたはあたしの父親なの？」

「おまえの母親を永遠に守ってやることもできず、おまえに正しい道を照らしてやることも出来ない男を父親とはいえまい」

グランドゥルスは部屋の鍵を開けながら言った

「でも、あたしがあの時の子どもだって...知ってて拾ったんでしょ？」

ドアを開けて 先に入れとうながすグランドゥルスは
一目見ればわかる...と言いたげに笑っている

「おまえの母親の願いの半分くらいは叶えてやれるかな、と」

あたしは ドアを閉めるグランドゥルスの胸に倒れこむ
もう悲しくはない、でも喜びの涙でもない、
光り輝くような不思議な水が
心を満たしてあふれ出て

止まらなかった

「こんな近くにいるなんて知らなかった。もう この世で一人きりなんだと思ってた」

あたしのおでこにキスをして
もう眠るようにとグランドゥルスは言った

あたしは動かない身体をようやく横にした

ベッドの 懐かしいような甘い香りを
胸いっぱい吸い込むと
今日のすべての出来事や
今までの不安が消えさる

このままずっとここにいたい

あたしの居場所は ここなんだろうか
潤った心はあたしの身体も満たしてゆく
こんなに幸せを感じたことはあったろうか

シェードランプだけ灯して
部屋を出ようとするグランドゥルスの
背中にむけて
思いもかけぬ言葉が口をついて出た

「ねえ、あたしはいつまでここにいていいの？あたしとあなたの上に永遠はあるの？」

グランドウルスは驚いたように振り向くと、しばらくして言った

「永遠は・・・自分の力で見つけることだな」

-fin-

.....

ギリシャ神話にこんな話があります。

(いろんな記述があるので要約)

アルテミスに仕える妖精カリストと神ゼウスの間に子どもが産まれます。

それを知ったゼウスの妃ヘラは、カリストを大熊に変えてしまいます。

大きくなったカリストの子アルカスは猟師になり、偶然出合った熊の姿のカリストを撃ってしまいます。

ゼウスはあわれに思い、母殺しの罪を着させないようアルカスも小熊の姿に変え、カリストと共に天に上げ星座にしました。

(その後も話は続きますが、いじわるな話なので省略)

北斗七星・北極星などを含む、おおぐま座・こぐま座にまつわるお話です。

子どもから見た親と

親から見た子どもって

かなり違うときがあるだろうな、と

ふと思いました。

それで、フィクションではありますが
昔の知り合いの女性の思い出を
香りづけに書きました。

バレるとマグナムで撃たれますが
(クロネコは黒いんで星座にはなれない)

母親のほうの心境って

どうなんだろうと

たとえば

子どもを放置する親の内面、
しなければならぬ事情。

がんばりぬいた末の出来事だったりもします。

こうであってほしいという

希望だけで書きました。

全編 お目通しいただければ幸いです。

不思議な水～ノエルの夜に

<http://p.booklog.jp/book/56547>

著者：黒野 ている

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/naomur/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/56547>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/56547>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ